

「日本3.0」

Vol.14

小池旋風の後には試される「日本の知」

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

ここ数日、日本を席捲している小池旋風——。小池氏に対しては「総理になりたいただけ」「政策がない」「都政をほったらかしにして無責任」といった非難が渦巻いています。小池新党はかなりの判をもとせず、小池新党はかなりの健闘するのではないかと読んでいます。なぜなら、大衆の「破壊願望」に火をつけているからです。小池さんは、「古いおじさん社会VS女性・若者」という対立軸をあぶりだしました。偉そうに威張っているくせに、過去

やしがらみを引きずってばかりで、世の中を何も変えられない。未来を描けない。挑戦できない。そんな「おじさん」たちに三下り半をつけようとする小池氏の姿は、あまりに痛快です。

あたかも、長年積もりに積もった不満が爆発し、熟年離婚を切り出した女性のようなすこみがあるのです。

小池さんは、デストロイヤー（破壊者）として、突出した才能を持っています。

しかしながら、過去の人生を見る限り、「創る才能」を持ち合わせているようには見えません。

結局、小池さんは、日本の古いしがらみを部分的に壊すことには成功するでしょうが、壊したところでその役割を終えるはず。破壊の熱狂が去った後に、おそらく政界のカオス状態が最低5年くらいは続くのではないのでしょうか。

日本の勝負は、そのカオスの後に、新しい政治の形を生み出せるのか、に尽きます。

たとえば、今は安倍政権も小池新党

も「保守」を掲げていますが、「保守」をどう定義するのか。日本の歴史と世界の潮流を踏まえて、普遍的なビジョンを示せるのか。中長期的な安全保障戦略をどこまでリアルに描けるのか。

具体的な政策論はもちろんです、それ以上に、それらの政策論を束ねるブランドデザイン（大戦略）が問われています。つまりは、日本人の知の深さが試されるのです。

来年は平成最後の年になる線が濃厚です。その記念すべき時に、小池さんがデストロイヤーとして浮上したのは、決して悪いことはありません。

明治維新150周年を迎える来年から、新しい日本の国づくりが始まる。経済、政治、メディア、教育など、あらゆる分野で、新時代のリーダーが生まれる。そのシナリオを実現するため、何よりも重要なのは、「知の力」です。

今こそ、われわれが必死に学ぶべきときなのです。



Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか?」がある